

終助詞「ね」「よ」「よね」の発話連鎖効力に関する一考察 ー談話完成タスク結果を基にー

西郷 英樹

要旨

本稿の目的は Saigo (2011) が提案した「ね」「よ」「よね」の意味機能に関する説明の有効性を考察することにある。Saigo (2011) が提案する意味機能の最大の特徴はこれら終助詞に発話連鎖効力があるとする点である。談話完成タスクから得られた被験者 6 名の内省データを基に考察を行った。タスクでは同じ文脈場面での同一発話内容に異なる終助詞が用いられた場合、その後どのような発話連鎖が連想されるか被験者に筆記形式で記入してもらった。考察の結果、「ね」「よ」「よね」が関わる発話連鎖の解釈において、Saigo (2011) が主張する発話連鎖効力の有効性が認められた。

【キーワード】 談話完成タスク、終助詞、「ね」、「よ」、「よね」

1. はじめに

終助詞「ね」「よ」は初級日本語文型項目として幅広く認知されている。しかしながら、学習者にとってこれらの運用能力の習得が難しいことは学習者の発話に日々触れている日本語教師なら誰しも認めることであろう。なぜ学習者は「ね」「よ」が使えるようにならないのか。この問いに対して考えられる答えのひとつとして、日本語教育でなされている「ね」「よ」の意味機能に関する説明が不十分だという理由が挙げられよう。日本語教科書でなされている「ね」「よ」の説明の主なものとして、①「ね」は話し手と聞き手の情報・判断の一致、「よ」はその不一致（対立）を表すという説明、②「ね」は話し手が聞き手に判断や意見の共有を確認・要求し、「よ」は話し手が聞き手の知らない（認識が不十分な）情報や判断を提示するという説明が広く認められている（今村 2011:37）。これらの説明に決定的に欠けているのは、なぜ対

話の中で話し手が聞き手との間に存在する情報・判断・認識等の一致・不一致をわざわざ明示するか、言い換えれば、話し手は何を意図して「ね」「よ」を対話で使っているのかという説明である。これら終助詞の方略的な使用に焦点を当てた説明を日本語学習者に提示すれば、「ね」「よ」を能動的に運用する必要性をより感じられ、運用能力の向上にもつながるのではないかと考える。

2. 日本語教育への応用を視野に入れた仮説構築の試み

終助詞「ね」「よ」に関しては、様々なアプローチからの数多くの先行研究があり、いまだ毎年のように研究論文も出され続けている。非常に概括的な言い方をすれば、80年代後半から90年代前半にかけては話し手と聞き手が情報や認識などの観点から対立しているか、一致しているかという観点（大曾 1986; 陳 1987; 益岡 1991 等）、また聞き手や話し手のどちらに情報が帰属するのか、近いのか、という観点（神尾 1990; Maynard 1993 等）からの研究が主流であった。同時期に出版された総合初級日本語教科書が多いこと、また非常に明快で理解しやすい意味機能であるためか、現在でもこれらの説明は日本語教科書で一般的に採用されている。しかしながら、しばしば指摘されている（今村 2011; 金水 1993; 加藤 2001 等）ように、これらの研究では説明できない「ね」「よ」の使用が多数存在するにも事実である。

90年代に入ると、これまでの聞き手の知識状態の推測という考え方から離れ、話し手が発話内容をどのような認知状態で聞き手に伝達しているかを知らせる談話指標とするという考え方が出てきた。この研究例として、記憶領域内での発話内容の処理状況を話し手に伝達するという談話管理理論（金水・田窪 1998; Takubo and Kinsui 1997 等）、話し手が話し手自身の発話情報の受容レベルを聞き手に提示することで対話調整の機能を果たしているという考え方（片桐 1995; Katagiri 2007）、さらには話し手が発話内容について排他的な知識管理を行う準備があるかないかを聞き手に提示する談話指標であるとする考え方（加藤 2001）などが挙げられる。これらの研究はそれ以前の研究とは違い、対話の中での話し手の意図と終助詞使用との係わりにより焦点が当てられていると言える。このため、これらの研究は終助詞の方略的使用という観点からすると一見日本語教育への応用がしやすいように思われる。しかし残念ながら日本語教育への応用を（第一）目的にしていないこれらの研究での議論は日本語教育に活用・応用するには抽象的であり、日本語教育実践の場での応用はいまだ行われていないようだ。

Saigo (2011) は「ね」「よ」の研究分野を切り開いてきたこれらの先行研究を参考にしつつ、認知言語学の基盤的概念とされる前景 (figure) と背景 (ground) という考え方を談話レベルに当てはめることで、「ね」「よ」の意味機能に関する仮説構築を試みている。この仮説ではこれらの終助詞の役割を次のように仮定している。「ね」「よ」は当該の発話内容を対話の中で話し手が前景化させたいのか、または背景化させたいのかを示す談話指標である。このような発話内容の扱いに関する表明は同時に聞き手に適切な発話での応答を指令する効力 (以下、発話連鎖効力) が発生する。同書前半でこの発話連鎖効力と語用論的制限から成る「ね」「よ」「よね」そして裸文末の意味機能に関する仮説を立て、後半では3種類の異なるタイプの自然会話データ (母語話者同士の雑談、母語話者同士の目標志向型会話、母語話者と非母語話者の雑談) を用いてその妥当性を検討している。

同書最終章では日本語教育への応用を視野に入れ、専門用語の使用を避けた「ね」「よ」「よね」及び裸文末の意味機能の説明を提案している。表 1 は本稿の考察対象外である裸文末を除く「ね」「よ」「よね」の提案内容である。この説明の有効性を考察することが本稿の目的となる。なお、提案は英文のため、日本語訳を付記した。

表 1 日本語教育のための意味機能説明

<p><i>Ne</i> is used at the end of a sentence when the speaker wants/expects the addressee's acceptance of the content of a sentence. The content of a sentence marked with <i>ne</i> should be something the addressee possibly knows or would accept readily to him/her.</p> <p>話し手が聞き手に発話内容を容認してほしい場合、またはそう期待できる場合に「ね」を用いる。基本的に「ね」が付けられる発話内容は発話内容は聞き手が知っている可能性がある場合、または難なく受け入れられるものである。</p>
<p><i>Yo</i> is used at the end of a sentence when the speaker wants/expects the addressee to respond to it with a new sentence which is inferentially related to it. Instead of the addressee, the speaker himself/herself could respond to it. The content of a sentence marked with <i>yo</i> should be something possibly new to her or even controversial.</p> <p>話し手が聞き手に発話内容に対してその文脈に沿うように新しい文で返答をしてほしい場合、「よ」が用いられる。聞き手の代わりに、話し手本人が自分自身の発した発話内容に新しい文で応答する場合もある。基本的に「よ」が付けられる発話内容は聞き手にとって未知だと考えられるもの、さらには摩擦を生み出すものである。</p>

Yone is used at the end of a sentence when the speaker wants/expects the addressee's acceptance of his/her idea that the content of the sentence could be developed further with something inferentially related to it. Like *ne*, the content of a sentence marked with *yone* should be something the addressee possibly knows or would accept readily to him/her.

発話内容がその文脈に沿う新しい内容でさらに発展できるという話し手の考えを聞き手に受諾してほしい場合、またはそう期待できる場合に、「よね」を用いる。「ね」と同様、基本的に「よね」が付けられる発話内容は聞き手が知っている可能性がある場合、または難なく受け入れられるものである。

3. 談話完成タスク

3.1 談話完成タスクの必要性

前述のように Saigo (2011) は自然会話データを仮説検証の際に使用しているため、同じ文脈場面での同一発話内容に「ね」「よ」「よね」が現れた場合、どのように会話の流れに影響するかという点に関する検証はない。そこで、本稿ではこの点について調査するため、談話完成タスクを実施した。今回のタスクで得られたデータは自然発話ではなく被験者の内省的データとしての扱いに留まるが、終助詞の違いでどのような会話の流れを作るか調べるために行われたタスクは、筆者が知る限り初の試みであり、終助詞の発話連鎖効力に関する今後の研究のための基礎参考資料として活用できると考える。次ページの表 2 は今回行ったタスクシートである。以下、談話完成タスクの詳細である。

3.2 文脈・場面

発話連鎖を扱う本研究では、終助詞が付加された発話が現れる文脈の設定は非常に注意を要する。なぜなら、その発話の後に続く発話に大きく影響を与えてしまうからである。そこで本タスクでは終助詞が付加された発話までの話の流れをできるだけ簡素化し、複数の被験者が想起する文脈場面の差異が現れる要因をできるだけ排除しようと試みた。設定した文脈場面は電話での恋人（花子と太郎）の会話である。

3.3 被験者

被験者は筆者が所属大学で 2012 年度前期に担当した日本語学の履修学生 6 名（男 4 名、女 2 名）で、全員日本語母語話者である。被験者には筆者が終助詞に関するデー

タ収集をしていることは事前に伝えたが、目的が終助詞の発話連鎖の調査であることは伝えていない。

表 2 タスクシート

恋人同士の会話
パターン①
花子：もしもし、おはよ。
太郎：あ、おはよ。
花子：ねえ、今日天気いいね。
{太郎・花子}：_____。
{太郎・花子}：_____。
{太郎・花子}：_____。
{太郎・花子}：_____。
パターン②
花子：もしもし、おはよ。
太郎：あ、おはよ。
花子：ねえ、今日天気いいよ。
{太郎・花子}：_____。
{太郎・花子}：_____。
{太郎・花子}：_____。
{太郎・花子}：_____。
パターン③
花子：もしもし、おはよ。
太郎：あ、おはよ。
花子：ねえ、今日天気いいよね。
{太郎・花子}：_____。
{太郎・花子}：_____。
{太郎・花子}：_____。
{太郎・花子}：_____。

3.4 タスク手順

被験者にタスクシートを配布し、10分ほどでタスクシート内の下線部をできるだけ自然だと考えられるやり取りで埋め、会話を完成するように指示した。また発話の連鎖性を見ることが本研究の目的であるため、被験者に誰（太郎か花子か）が発話をするかも決めてもらった。なおタスクは無記名で行なった。

3.5 タスク結果⁽¹⁾・分析

3.5.1 終助詞「ね」

3.5.1.1 回答結果

「ねえ、今日天気いいね。」(以下、「ね」文)という花子の発話に続いて、被験者6名が作成した会話の流れは以下の通りである。表中の「ね:A-(数字)」は順に、調査対象の終助詞、被験者、発話の順番を表す。

表3「ね」のタスク結果

ね:A-1	太郎	そうだね。声がうれしそうだけど、なんか良いことあったの？
ね:A-2	花子	... うん。なんでもない。
ね:A-3	太郎	なんやねん。
ね:B-1	太郎	うん、そうだね。
ね:B-2	花子	今、何してるの？
ね:B-3	太郎	今、起きたとこだよ。
ね:B-4	花子	どっか行かない？
ね:C-1	太郎	そうだね。せっかくだしどこか出かける (?)
ね:C-2	花子	一緒にショッピング行きたいかな。
ね:C-3	太郎	じゃあ、準備して行こうか。
ね:C-4	花子	うん。
ね:D-1	太郎	そうだね。どっか行こうか。
ね:D-2	花子	おにぎりでも持っていく？
ね:D-3	太郎	それ、いいね。犬もつれて行こうよ。
ね:D-4	花子	準備するから待ってて。すぐそっち行く。
ね:E-1	太郎	そうだね。どっか行く？
ね:E-2	花子	うん。なんかあいたいなー、今日何かあんの？
ね:E-3	太郎	1時からゼミだけど、ごはんでもいく？
ね:E-4	花子	うん！とりあえず駅いこっか。
ね:F-1	太郎	でも、雨ふってるよ？
ね:F-2	花子	私、雨が好きだから...。
ね:F-3	太郎	...

3.5.1.2 同意表明要求としての「ね」

被験者AからEまでの5名は花子の「ね」文に対して太郎からの同意を続けている(ね:A-1/C-1/D-1「そうだね」、ね:B-1「うん、そうだね」)。「ね」に聞き手から発話内容に対して同意や容認を求める働きがあることは多くの先行研究、そして日本語教

科書でも広く示されており、この結果は至極妥当なものであると言える。

同意を示さなかった被験者 F が作成した太郎の発話(ね:F-1「でも、雨降ってるよ?」)はどのように解釈できるだろうか。雨が降っている日に「ねえ、今日天気いいね。」という発話は一般的に現れないが、他の被験者とは一味違う会話例を作ろうという被験者 F の意図が今回のタスクへの回答を通して見てとれる。しかしながら、「でも、雨降ってるよ?」(ね:F-1)の「でも」の使用に同意表明を求める「ね」の発話連鎖効力への意識が見て取れる。つまり、同意を引き出そうとする「ね」の効力と相反する応答をするという指標として「でも」を使用したと考えられよう。

3.5.1.3 同意表明後の連鎖

3.5.1.3.1 目的を果たすための土台作りの「ね」

次に「ね」が引き出した発話内容の同意の表明以降にどのように話が展開していったかを考察した結果、被験者 5 名(ABCDE)中 4 名がどこかへ行こうという提案をしていることが分かった。その内、1 名(B)は太郎からの同意の表明後、花子から太郎に何をしているのかという問い(ね:B-2)、そして太郎からの起きたばかりだという返答(ね:B-3)を挿入し、その後花子自身に提案をさせている(ね:B-4「どっか行かない?」)。花子は太郎の同意の表明を受けた後の対話の中で、この提案をしようと考えたのだろうか。それともこの提案をしようと考え、その目的を達成させる下準備として、「今日天気いいね。」という発話に至ったのだろうか。太郎の同意表明と花子の提案の間に長い沈黙や挿入発話などがあるなど特殊な場合を除いては、後者であると考えるのが妥当だと筆者は考える。その場合は、同意の表明を促す「ね」を用いた「今日天気いいね。」という発話は、その後に意図している提案の土台作りとして機能していると言える。言い換えれば、「ね」を用いて話を発展させる下地を作ろうとしているのである。

被験者 3 名(CDE)は花子自身ではなく同意を表明した太郎に提案をさせている(ね:C-1「そうだね。せっかくだしどこか出かける(?)」⁽²⁾、ね:D-1「そうだね。どっか行こうか。」、ね:E-1「そうだね。どっか行く?」)。これらはどのように解釈できるか。花子の「今日天気いい」という発話への同意の表明をすることでこの発話内容を会話の土台とし、続けて提案をしたと考えることができよう。この場合、花子が作り出そうとしている話の流れ(発話意図)をくみ取って、花子が意図している提案を太郎が自分から切り出したとも言える。

以上、6名の被験者中4名が「今日天気いい」という命題に対してどこかへ行こうという提案を続けたが、これは「今日は天気がいい」という命題と提案という発話行為との相性がいいからであろう。「ね」が付加される発話内容によってその他の様々な言語行為が現れてもまったく違和感がないように思われる。例えば、母親が子供にもっと勉強をするように促したい場合は「最近成績悪い」といった命題に「ね」を付加し、促しの土台作りをすることもできるだろう。

3.5.1.3.2 情意的な共通基盤構築の「ね」

被験者Aが作った太郎と花子のやり取りを見てみよう。花子の「ね」文に同意を表明した後、太郎は花子の声のトーンから何かいいことがあったのかと問うている(ね:A-1「そうだね。声がうれしそうだけど、なんか良いことあったの?」)。太郎からの質問を受けて、花子は少し間(「...」)をおいて「ううん。なんでもない。」(ね:A-2)と返答している。話の流れを見る限り、少なくとも二つの解釈ができる。一つ目の解釈はこれまで考察したように、「ね」を具体的な目的達成の土台作りとして考える解釈である。花子は太郎に「ね」文への同意の表明の後、上述のC-1、D-1、E-1で見たような具体的な提案(勧誘)を期待していた。しかしながら、太郎からそのような提案もなく、また花子自ら提案をするのも気後れし、「... ううん。なんでもない」という若干すねた印象を与える発話をするに至った。

二つ目の解釈は、特に達成したい目的がない場合である。花子は自分が放った「ね」文を、提案など具体的な目的を達成させるための土台作りにしようという考えはなく、ただ太郎と会話のやり取りをすること自体が目的だったという解釈である。つまり、聞き手との間に情意的な共通基盤を形成する目的で、聞き手から同意表明を促す発話連鎖効力を持つ「ね」を用いたということである⁽³⁾。このような「ね」の使用も終助詞の方略的使用の観点から、より明示的に日本語教育に取り入れていくべきだと考える。

3.5.1.4 方略的な「ね」の使用説明

談話完成タスクから得られた「ね」に関するデータを連鎖性の観点から考察し、「ね」の方略的使用の一端が明らかになった。これまでの日本語教科書に見られるような聞き手から同意や確認を求めるという説明で終わるのではなく、何のために「ね」を用いて話し手は聞き手に対して同意や確認を要求するのか、その方略的使用という視点

にたった意味機能の説明が「ね」の運用促進のためにもより有効だと思われる。

Saigo(2011)で提案された日本語教育のための「ね」の説明も例外ではなく、同意表明を受けた後の発話連鎖について言及がない点で、方略的視点からの「踏み込み」が足りず、修正が必要であることが分かった。

3.5.2 終助詞「よ」

3.5.2.1 回答結果

「ねえ、今日天気いいよ。」(以下、「よ」文)という花子の発話に続いて、被験者6名が作り出した会話の流れは以下の通りである。

表4 「よ」のタスク結果

よ:A-1	太郎	ほんとだね。どっか行こうか。
よ:A-2	花子	えっ！？ほんと！？
よ:A-3	太郎	うん。
よ:A-4	花子	やったー！！
よ:B-1	花子	どっか行こうよ。
よ:B-2	太郎	いいね～。どこ行く？
よ:B-3	花子	京都
よ:B-4	太郎	暑いからイヤ。
よ:C-1	太郎	そうなの。あ、本当だ。
よ:C-2	花子	気温も高いらしいからプールでも行く(？)
よ:C-3	太郎	確かに暑いからそうしようか。
よ:D-1	太郎	ああ、昨日は大雨だったもんなあ。
よ:D-2	花子	でも暑すぎない？
よ:D-3	太郎	うん、俺は昨日ぐらいの涼しさが良かった。
よ:D-4	花子	同感～。
よ:E-1	太郎	そう？こっちめっちゃくもってる。
よ:E-2	花子	ほんと？
よ:E-3	太郎	あ、雨ふってきたかも。
よ:E-4	花子	傘もってないの？
よ:F-1	太郎	絶好のニート日和だな！こういう日は家こもるに限る。 じゃ、また明日。
よ:F-2	花子	またね～。

3.5.2.2 方略的視点から見る日本語教科書での「よ」の説明

「よ」文への応答として、「ね」文への応答で見られた「(うん、) そうだね。」という同意の表明を作り出した被験者はいなかった。自明ではあるが、これは「ね」と「よ」が引き起こす連鎖性において何らかの違いがあると被験者すべてが認識していることを示している。では、どのような違いなのだろうか。花子の「よ」文に対して被験者 A は「ほんとだね。」(よ:A-1) という太郎の発話を作り出している。冒頭の「ほんとだね。」は太郎が花子の発話を聞くまでその日の天気を把握していなかったことを示している。被験者 C の「そうなの。あ、本当だ。」(よ:C-1) と被験者 E の「そう？」(よ:E-1) も同様である。これらの応答は聞き手が知らないことを伝える際に「よ」を用いるという日本語教科書で一般的に用いられている説明とうまく合致する。しかしながら、筆者は日本語を留学生に教えていてこの説明だけではあまり意味がないように思えて仕方がない。この説明では聞き手にとって未知の情報を伝えているということを話し手がわざわざ「よ」を用いて表明することに何の意味があるのか、どんな目的があるのか学習者には伝わらない。この方略的視点の欠如が現在初級文法として扱われている「よ」が上級レベルになるまでほとんど使われていない(山内 2005, 151) ことの要因の一つもなっているのではないだろうか。そして、この問題の解決策の一つとして、本稿の主旨である連鎖性からの終助詞の考察が有効であると考える。

3.5.2.3 「よ」の発話連鎖効力

3.5.2.3.1 発話連鎖の解釈を可能にする説明

「よ」文以降の話の流れの中で被験者の半数にあたる 3 名が太郎もしくは花子に何らかの提案をさせている。被験者 A と B は共にどこかへ行こうかという提案(よ:A-1 「ほんとだね。どっか行こうか。」、よ:B-1 「どっか行こうよ」) で、被験者 C はプールへ行こうかという提案(よ:C-2 「気温も高いらしいからプールでも行く(?)」⁽⁴⁾) である。しかしながら、花子と太郎のうちどちらが提案したのか、また話のどのターンで提案したのか、という 2 つの観点から見ると、三者三様であることが分かる。被験者 A が作り出した会話では、花子の「よ」文を受け、「ほんとだね。」に続けて太郎が「どっか行こうか。」と提案している。花子の「よ」文と太郎の「ほんとだね。」というやり取りだけを考察対象とすると、前述したように「よ」は聞き手が知らない場合に用いられるという説明で終わってしまい、その説明には「よ」の使用に関する花子の意図は含まれない。しかしながら、「よ」が話し手と聞き手の相互作用性が最

大の特徴である対話に特有であることを考えると、聞き手から何らかの言語的、または非言語的行動を引き出すために「よ」を使用すると考えるのが自然ではないだろうか。

聞き手が既に知っていると考えられる情報や、話し手と聞き手の認識が一致していると考えられる場合に用いられると指摘されている「ね」は、聞き手から同意や確認を引き出すという発話連鎖効力があつた。「ね」とは反対に、聞き手の知らないことを伝える時や話し手と聞き手の認識が一致していない時に用いられると一般的に指摘されてきた「よ」であるが、Saigo (2011)はこのような語用論的性質を持つ「よ」は単に同意を表明する以上の連鎖を引き出す機能があると主張する。上述した被験者 3 人が作り出した提案 (よ:A-1, B-1, C-2) がそれに当たる。もちろん文脈によって「よ」の発話連鎖効力により引き出される応答は様々なものに成りえる。また話し手がどの程度具体的な応答を期待しているか、また聞き手がどの程度話し手が期待する応答を正確に推測できるかも、様々な要因によって変化するだろう。被験者 A が作り出した花子の軽い驚きを表している「えっ！ほんと！？」(よ:A-2)を例にとって考えてみる。花子は何かしらの期待を持ちながら「よ」を用いて自分の発話内容に対してその文脈に沿う新しい発話内容を太郎に問いかけた。意外にも太郎からどこかへ行こうかという好意的な提案が難なく引き出せたので、この驚きの発話に至ったと解釈できよう。終助詞を連鎖性の観点から考察してこなかった先行研究の説明では、花子の「よ」文から花子のこの驚きの発話に至る流れは説明できないだろう。連鎖性という視点から終助詞を考察することで初めて「よ」文が話の流れにどのように関わっているか解明できるのである。

3.5.2.3.2 聞き手が発話連鎖効力に応答しなかった例

被験者 C が作り出した会話例は「よ」文に対して話し手が期待している応答を聞き手が作り出さなかった場合の一例だと考えられる。花子の「よ」文に対して、太郎の反応はその時初めて会話時の天気を認知したことを示す「そうなの。あ、本当だ。」(よ:C-1)だけである。仮に「よ」の機能が知らない情報を聞き手に伝える際に用いるというものだけであつたら、太郎の応答で事足りる。しかしながら、Saigo (2011)が主張する「よ」の意味機能を当てはめると、太郎のこの応答では十分ではない。何が足りないのか。その答えは次の花子の発話の中に見て取れる。花子は自らプールにでも行こうかという提案をしている(よ:C-2)。これは、花子が放った「よ」文の発話連鎖

効力を太郎に受け流され、自らが応答したと考えられよう。この一連の流れから花子は「よ」文を用いる際、既にプールに行きたいという具体的な願望があったことを示している。言い換えれば、そのような願望が既にあったために、文脈に沿った新たな発話内容を引き出す発話連鎖効力を持つ「よ」を方略的に用いたと言える。

3.5.2.3.3 連鎖性から見る「ね」と「よ」の大きな違い

被験者 B の回答では、「よ」文の後、花子自身が「どっか行こうよ。」(よ:B-1)と提案をしている。これは、Saigo(2011)でも述べられているように、「よ」文の後、聞き手からの応答を待たずに話し手自身が「よ」の発話連鎖効力に答える形で提案をしていると考えられよう。このように話者自身が聞き手の応答を待たずして、自分が放った終助詞の発話連鎖効力に応答するという機能は「ね」にはない。既に考察したように、6名の被験者のうち4名が「ね」文以降の会話の流れの中で花子か太郎に提案をさせていたが、「ね」文はあくまでも聞き手からの同意の表明を受けて初めて次の発話の土台となるのである。一方、「よ」は聞き手からの同意なしに「よ」文の発話内容を土台にし、新しい発話内容を促す談話指標だと考えられる。

3.5.2.3.4 文脈と発話連鎖

被験者の半数にあたる被験者 DEF は「よ」文に対する応答として花子または太郎に提案をさせていない。被験者 D は花子の「よ」文に対して太郎に「ああ、昨日は大雨だったもんなあ」(よ:D-1)と言わせている。この応答は被験者 ABC の会話例に見られたような提案ではない。しかし、前述したように、「よ」文に対する応答は「よ」文が現れた文脈、つまりここでは前日の花子と太郎の行動や話した内容等に大きく左右される。「ああ、昨日は大雨だったもんなあ」という太郎の発話は、被験者 D が花子と太郎の前日の会話を大雨で湿度が高く不快だと話していたと想定した場合、「よ」の発話連鎖効力に適切に応答していると言える。

被験者 E が作り出した「よ」文への応答「そう？こっちめっちゃくもってる。」(よ:E-1)はどうだろうか。花子の所在地の天気を聞いた太郎の軽い驚きを示す冒頭の「そう？」に続く「こっち」は花子と太郎の会話時の所在地が離れていることを示しており、「こっちめっちゃくもってる」で太郎の所在地の天気を伝えている。花子がただ単に太郎が知らないこと、つまり花子がいる場所の天気を純粹に伝えるためだけに「よ」を用いたのだろうか。仮にこの答えが正しかった場合、なぜテレビでの天気

予報師は視聴者に翌日の天気伝える際に「よ」を付加しないのかという問題も出てくる。この点を見ても対話特有の談話指標である終助詞は語用論的性質だけではなく、発話連鎖効力もあると言えよう。「そう？」の後に続く「こっちめっちゃくもってる。」という太郎の発話から考えると、花子が「よ」文を用いた理由は単に花子と離れた地域にいる太郎に花子のいる地域の天気を知らせるだけではなく、その発話内容に対する文脈に沿った新しい発話内容、つまり太郎の地域の天気を引き出そうとしていたのではないだろうか。

3.5.2.3.5 発話連鎖効力への反抗

最後に「よ」文に対する被験者 F の応答「絶好のニート日和だな。こういう日は家にこもるに限る。じゃあ、また明日。」(よ:F-1) は連鎖性の観点からどのように解釈できるか。他の被験者が作り出した「よ」に対する応答が文脈に沿ったものであると考えられるのに対して、被験者 F が作り出した応答は連鎖性の観点から話の発展性を断ち切っていると言えよう。その意味で連鎖的観点からは非協力的であると言える。しかし、このような F の天邪鬼的応答は「よ」文の持つ発話連鎖効力を意識し、意図的にその効力に逆らっていると考えられるのではないだろうか。

3.5.3 終助詞「よね」

3.5.3.1 回答結果

「ねえ、今日天気いいよね。」(以下、「よね」文) という花子の発話に続いて、被験者 6 名が作り出した会話の流れは以下の通りである。

表 5 「よね」のタスク結果

よね: A-1	太郎	そだね。何か気持ちがいいね。
よね: A-2	花子	どこか行かない？
よね: A-3	太郎	えー？
よね: A-4	花子	行こうよう！！
よね: B-1	太郎	うん、どうしたのいきなり。(笑)
よね: B-2	花子	どっか行こうかなと思って。
よね: B-3	太郎	どこ行くの？
よね: B-4	花子	どこがいい？
よね: C-1	太郎	本当にこんな日は気持ちがいいね。
よね: C-2	花子	下で子どもたちも楽しそうに遊んでるわ。

よね: C-3	太郎	平和だね。
よね: D-1	太郎	昨日はあんなに曇ってたのになあ。
よね: D-2	花子	マラソン大会嫌だー。
よね: D-3	太郎	うん、仕方ないよ。晴れちゃったんだし。
よね: D-4	花子	雨になれ。
よね: E-1	太郎	そうか？日でてないよ。
よね: E-2	花子	まじか、すごい気持ちいいよ。
よね: E-3	太郎	せんたくできないなー。
よね: E-4	花子	どうせめんどくさくてやる気もないしよ。
よね: F-1	太郎	どっか行く？
よね: F-2	花子	そっち行くよ。
よね: F-3	太郎	おことわりします。

3.5.3.2 2つの発話連鎖効力を持つ「よね」

「ね」「よ」の研究に比べ、先行研究の少ない「よね」だが、「ね」「よ」同様、これまでのなされた考察では「よね」の発話連鎖効力について明示的に言及した先行研究はない。これまでなされた「よね」の意味機能に関する説明を大別すると、話し手が主張した発話内容に対して聞き手から同意を求めるという説明（野田 1993; Makino and Tsutsui 1986 等）、または話し手がいまだ確信が持てない発話内容への確認要求をするという説明に分けられよう（伊豆原 1993; 庵他 2000; 庵他 2001 等）。

Saigo(2011)が提案する「よね」の意味機能に関する説明では「よね」は「よ」と「ね」の複合体であり、「よ」文が「ね」のスコープに入っていると考えられている。つまり、「よ」文が持つ発話連鎖効力の妥当性に対して「ね」で聞き手からの同意表明を促すということになる。つまり、「よね」文の発話内容が、その文脈に沿う新たな発話内容で発展できるという話し手の考えへの同意の表明である。この点で、文末に位置する「ね」の発話連鎖効力は聞き手に対して直接的、一方、「よ」文の効力は間接的に働くと言える。そのため、直接的な「ね」への応答への効力は強く、「よ」のそれは「ね」に比べ弱いと言える。言い方を変えれば、「よ」の発話連鎖効力はまだ生きていくということである。「よね」文に対して被験者 A が作り出した「そだね。何か気持ちがいいね。」(よね:A-1)という応答は、この「よね」の2種類の発話連鎖効力が如実に現れている例だと言える。「そだね。」が「ね」の効力への応答であり、それに続く「何か気持ちいいね。」が「よ」の効力への応答である。

3.5.3.3 聞き手が「よ」の発話連鎖効力が分からなかった例

被験者 B の「よね」文への応答は「うん、どうしたのいきなり。(笑)」(よね:B-1)である。Saigo(2011)で提案している発話連鎖効力抜きにはこの太郎の軽い当惑は説明ができない。花子は「よね」を用いて太郎に「今日は天気がいい」という発話内容が、その文脈に沿って新たな発話内容でさらに発展できるという考えに同意をさせようとしているのである。しかしながら、太郎は花子がどんな発展性を考えているのか分からなかったために起こった当惑だと考える。つまり、太郎は花子の発話意図がつかめず、それに同意を求められて困り、苦笑いをしているのである。この太郎の当惑の後に、花子の「どっか行こうかなと思って。」(よね:B-2)という発話が続いている。この発話は、太郎に「よね」の発話意図が理解されなかったために、自分自身の「よね」文の「よ」の効力に自らが応答したと考えられる。

3.5.3.4 Saigo(2011)では触れられていない発話連鎖

他の被験者の回答に移る前に、上述の被験者 B の「うん、どうしたのいきなり。(笑)」の冒頭の「うん」の使用について考えてみる。この「うん」はどのように解釈できるだろうか。Saigo(2011)の主張に従えば、「よ」を用いる花子の意図が分からないことを示す発話の前に、その意図への同意の表明が現れるのは論理的ではない。つまり、この「うん」が単なる花子の発話への気づきではなく、同意を表す場合、その対象は「よ」の効力ではなく、命題そのものということになってしまう。その場合、どのように Saigo(2011)の主張との整合性を問えばいいのだろうか。まずは、その主張そのものが誤りだと結論づけることもできるだろう。つまり、Saigo(2011)が主張する「よ」文が「ね」のスコープに落ち込むという考えを否定し、「よね」の「よ」と「ね」が等しく命題そのものに関連付けられているという考え方である。しかし、この場合、お互いに相容れない語用論的性質を持つと言われている「ね」「よ」が、どうして共起するのかという根本的な問いに答える必要がある⁽⁵⁾。また、なぜ「よね」の反対である「ねよ」が現れないのか説明する必要も出てくるだろう。

この「うん」の二つ目の解釈に、太郎が花子の「よね」の使用意図が理解できず、戸惑ってしまったという文脈の特殊性に起因した「うん」である、という解釈が考えられる。花子の意図する「よ」の効力を推察できないことを示す「どうしたのいきなり」という発話の前に、命題自体には同意はしていることを表す指標として「うん」を太郎が挿入したという考え方もできよう。さらには、「よね」の使用意図が掴めな

いと明確な表明である「どうしたのいきなり」という発話に至る過程として、その使用意図を探っている指標として「うん」と発した可能性もあるかもしれない。今回のタスクが筆記での実施であるため、被験者 B がこの「うん」にどのようなイントネーションを想定していたか不明であるが、少なくともこのような複数の解釈が可能であろう。

被験者 CDF の「よね」文への応答発話には「うん。」「そうだね。」など同意の表明は見られず、「本当にこんな日は気持ちがいいね。」(よね:C-1)、「昨日はあんなに曇ってたのになあ。」(よね:D-1)、「どっか行く?」(よね:F-1)という新たな発話内容で発展させている。つまり、Saigo(2011)が直接的な効力を持つと主張している「ね」への応答はせずに、間接的効力の「よ」文へ応答をしていることになる。このような連鎖は Saigo(2011)では言及されていない。この点は自然発話データに基づく更なる考察が必要であり今後の課題とするが、会話の効率性という観点から考えれば、まず初めに「ね」の発話連鎖効力に応答して同意の表明をし、その後に「よ」の効力に応答し、新たな発話内容を提示するのは非常に効率が悪い。そのため、聞き手が「よね」の「よ」の間接的連鎖効力に応答する場合、「ね」への応答を省略することは自然な流れと言えるかもしれない。

3.5.3.5 聞き手が発話内容自体を否定する例

被験者 E は花子の「よね」文の後に「そうか?」(よね:E-1)という発話を作り出している。「そうか?」はその後の「日でてないよ。」から分かるように終助詞の発話連鎖効力ではなく、発話内容そのものに疑問を呈している。その後に、花子が「まじか、すごい気持ちいいよ。」(よね:E-2)と述べているが、これは花子が「よ」を用いて引き出そうとした発話内容と考えてもおかしくはない。前述の被験者 C は「よね」に応答する形で非常に類似している「本当にこんな日は気持ちがいいね。」(よね:C-1)と述べている。言い換えれば、花子が放った「よね」の連鎖的効力への応答が太郎の発話に見られなかったので、その効力(正確に言えば「よ」の部分)に花子自身が応答したと考えられる。「よね」の「よ」の効力に自ら応答するという連鎖は、先ほど被験者 B の回答に見られたものと同じだと言える。

4. まとめと今後の課題

本稿では談話完成タスクで得られた被験者 6 名の内省データを基に、Saigo(2011)

の提案する「ね」「よ」「よね」の意味機能の有効性を考察した。その結果、終助詞の発話連鎖効力という考え方をを用いれば、先行研究ではなし得なかった、終助詞が発話連鎖にどのように影響を与えているかという発話連鎖の解釈が可能になることが認められた。しかしながら、Saigo(2011)が提案する日本語教育用の「ね」の説明について方略的な視点からの修正が必要であることが分かった。また Saigo(2011)で触れていない「よね」の発話連鎖が回答の中に数箇所見られた。これらは今後の課題としたい。

最後に、終助詞を連鎖性の視点から考察する研究・作業はまだ始まったばかりである。Saigo(2011)や本稿での議論は荒削りな部分が多々あるが、今後の研究のたたき台となれば幸いである。そして、連鎖性という視点からの終助詞研究の成果が日本語教育の現場へ応用できる日を願い、本稿を締めくくりたい。

注

- (1) 被験者から回収した記入済みタスクシートを画像データとして巻末資料とした。
- (2) 被験者からの回答には「？」はなかったが、文脈から明らかに音調は上昇調であると判断したため、筆者が「(?)」を付け加えた。
- (3) この「ね」の機能に関しては、Cook(1990)が詳しく論じている。
- (4) 注(2)と同じ。
- (5) この点に関してはこれまで多くの研究者(金水 1993; 白川 1992; 蓮沼 1992 等)も指摘している。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 伊豆原英子(1993)「終助詞『よ』『よね』『ね』の総合的考察－『よね』のコミュニケーション機能の考察を軸に－」『日本語・日本文化論集』第1号 pp.21-34 名古屋大学留学生センター
- 今村和宏(2011)「終助詞『よ』『ね』の『語りかけタイプ』と体の動き」『言語文化』第48号 pp. 37-51 一橋大学
- 大曾美恵子(1986)「誤用分析1『今日はいい天気ですね。』－『はい、そうです。』」『日本語学』第5巻9号 pp. 91-94 明治書院

- 片桐恭弘 (1995) 「終助詞による対話調整」『言語』第 24 卷 11 号 pp.38-45 大修館書店
- 加藤重広 (2001) 「文末助詞『ね』『よ』の談話構成機能」『富山大学人文学部紀要』第 35 号 pp. 31-48
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館書店
- 金水敏 (1993) 「終助詞ヨ・ネ」『言語』第 22 卷 4 号 pp.118-121 大修館書店.
- 金水敏・田窪行則 (1998) 「談話管理理論に基づく『よ』『ね』『よね』の研究」『音声による人間と機械の対話』(堂下修司・新美康永・白井克彦・田中穂積・溝口理一郎編) pp. 257-271 オーム社
- 白川博之 (1992) 「終助詞『よ』の機能」『日本語教育』第 77 号 pp. 36-48, 日本語教育学会
- 陳常好 (1987) 「終助詞一話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞一」『日本語学』第 6 卷 10 号 pp. 93-109
- 野田恵子 (1993) 「終助詞『ね』と『よ』の機能一『よね』と重なる場合一」『言語文化と日本語教育』第 6 号 pp.10-21 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- 蓮沼昭子 (1992) 「終助詞の複合形『よね』の用法と機能」『対照研究 第二号 発話マーカ―について』(筑波大学つくば言語文化フォーラム編) pp. 63-77 筑波大学
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 山内博之 (2005) 「話すための日本語教育文法」『コミュニケーションのための日本語教育文法』(野田尚史編) pp. 147-165 くろしお出版
- Cook, H M. (1990) The sentence-final particle 'ne' as a tool for cooperation in Japanese conversation. *Japanese/Korean Linguistics* 1 pp. 29-44.
- Katagiri, Y. (2007) Dialogue functions of Japanese sentence-final particles 'yo' and 'ne'. *Journal of Pragmatics* 39(7) pp.1313-1323.
- Makino, S. and Tsutsui, M. (1986) *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*, The Japan Times.
- Maynard, S K. (1993) *Discourse Modality: Subjectivity, Emotion, and Voice in the Japanese Language*, John Benjamins.
- Saigo, H. (2011) *The Japanese Sentence-final Particles in Talk-in-Interaction*, John Benjamins.
- Takubo, Y and Kinsui, S. (1997) Discourse management in terms of mental spaces. *Journal of Pragmatics* 28(6) pp.741-758.

(hsaigo@kansaidai.ac.jp)

図1 被験者Aのタスク結果

恋人同士の会話

パターン①

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいね。

(太郎・花子)： ええだね。

(太郎・花子)： うん、ええだね。何か面白いことあるの？

(太郎・花子)： --- うん、すきでもない

(太郎・花子)： でもねん。

パターン②

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいよ。

(太郎・花子)： うん、ええだね。どこ行くの？

(太郎・花子)： ええ、どこか？

(太郎・花子)： うん。

(太郎・花子)： や、えー!!

パターン③

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいね。

(太郎・花子)： ええだね、何か面白いことあるの？

(太郎・花子)： ええ、どこか？

(太郎・花子)： えー?

(太郎・花子)： うん、ええ!!

図2 被験者Bのタスク結果

恋人同士の会話

パターン①

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいね。

(太郎・花子)： うん、ええだね。

(太郎・花子)： うん、何してるの？

(太郎・花子)： 今、起きてるよ。

(太郎・花子)： どうか行くの？

パターン②

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいよ。

(太郎・花子)： どうか行くの？

(太郎・花子)： いいね、どこ行くの？

(太郎・花子)： ええ、どこか？

(太郎・花子)： 暑いからイヤ。

パターン③

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいね。

(太郎・花子)： うん、どうしたの？

(太郎・花子)： どうか行くの？

(太郎・花子)： どうか行くの？

(太郎・花子)： どうか行くの？

図3 被験者Cのタスク結果

恋人同士の会話

パターン①

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいね。

(太郎・花子)： そうだね。せっかくだしどこか出かけろ。

(太郎・花子)： 一緒にランニングに行きたいかな。

(太郎・花子)： じゃあ、準備して行こうか。

(太郎・花子)： うん。

パターン②

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいよ。

(太郎・花子)： そうなの。あ、そうだ。

(太郎・花子)： 気温も高いからプールでも行

(太郎・花子)： 泳がたい。暑くはないかな。

(太郎・花子)： うん。

パターン③

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいよね。

(太郎・花子)： 今日はこんな日は気持ちいいね。

(太郎・花子)： 下で子どもたちも楽しそうに遊んでるね。

(太郎・花子)： 平和だね。

(太郎・花子)： うん。

図4 被験者Dのタスク結果

恋人同士の会話

パターン①

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいね。

(太郎・花子)： そうだね。どこか行こうか。

(太郎・花子)： おにぎりでも持っていく？

(太郎・花子)： それ、いいね。犬も連れて行こうよ。

(太郎・花子)： 準備するから待ってて。すぐ行く。

パターン②

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいよ。

(太郎・花子)： ああ、昨日は大雨だったもんね。

(太郎・花子)： でも暑すぎない？

(太郎・花子)： うん。俺は昨日ぐらいの涼しさが良かった。

(太郎・花子)： 同感～

パターン③

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいよね。

(太郎・花子)： 昨日はあんなに曇、てたのになあ。

(太郎・花子)： マラソン大会、嫌だー。

(太郎・花子)： うん。仕方ない。暗いから、さっさと帰ろう。

(太郎・花子)： 雨になれ～

図5 被験者Eのタスク結果

恋人同士の会話

パターン①

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいね。

(太郎・花子)： そうだね。どこか行く？

(太郎・花子)： うん、なんかあったいなー、今日何かあんの

(太郎・花子)： 1時からせみだけって、ごはんでもいい？

(太郎・花子)： うん！ とりあえず馬鹿いこっか

パターン②

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいよ。

(太郎・花子)： そう？ こっちめっちゃくもってる

(太郎・花子)： ほんと？

(太郎・花子)： あ、雨ふってきたかも

(太郎・花子)： 傘もってないの？

パターン③

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいよね。

(太郎・花子)： そうか？ 日、でてたよ

(太郎・花子)： まじか、すごい気持ちいいよ

(太郎・花子)： せんたくできないなー

(太郎・花子)： どうせめんどくさくてやる気もないしよ

図6 被験者Fのタスク結果

恋人同士の会話

パターン①

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいね。

(太郎・花子)： でも、雨ふってるよ？

(太郎・花子)： 私、雨か好きだから...

(太郎・花子)： ...

(太郎・花子)： ...

パターン②

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいよ。

(太郎・花子)： 結婚のニート日和りだな！

(太郎・花子)： こういう日は家にもたれろ

(太郎・花子)： じい、また明日

(太郎・花子)： またねー

パターン③

花子：もしもし、おはよ。

太郎：あ、おはよ。

花子：ねえ、今日天気いいよね。

(太郎・花子)： どこか行く？

(太郎・花子)： えっ、行くよ

(太郎・花子)： おことありしよ

(太郎・花子)： ...